

環境福祉学会

News Letter

ニュースレター MAY 2008

8

目次

第4回年次大会のご案内	1
第9回事例研究会①	2
第9回事例研究会②	3
組織及び役員一覧・事務局だより	4

環境福祉学会 事務局 東京都港区南麻布5-16-6 コウセイ広尾3F
創造学園大学 東京本館内
TEL. 03-3447-3321 FAX. 03-3447-3681
<http://www.kankyofukushi.jp>
E-mail: info@kankyofukushi.jp

第4回環境福祉学会年次大会のご案内

環境福祉学会の年次大会は、早くも第4回を数えることになり、本年秋、下記のように東京で開催されます。

これまでの年次大会のテーマを振り返ってみますと、第1回（岡山）は「環境福祉の誕生」、第2回（高崎）が「環境福祉の発見」、第3回（名古屋）は「環境福祉の実践」と、それぞれに充実した内容の大会でありました。また回を重ねるごとに参加者も増え学会としても大きく成長、発展して参りました。今や「環境福祉」は時代の要請であり、家庭、学校、地域社会から、企業、自治体、国家の枠を超え、地球規模での人類的課題であると申せましょう。

第4回は少しく視点を変え、時間軸を入れることに致しました。子どもあるいは次世代に目をむけ、「次世代を育む環境福祉」というテーマを掲げております。

私どもが後世に残すべきものは、子どもや孫が笑顔で過ごせる社会であります。環境も福祉も、そして環境福祉も、プライマリーには次世代のためであり、次世代はまたその次の世代へと受け継いでいく、持続性sustainabilityを持たなくてはなりません。プログラムでは、まず特別講演を元環境大臣の小池百合子先生にご快諾頂き、基調講演は炭谷茂元環境事務次官をお願いいたしました。パネルディスカッションのテーマは近年の子どもをめぐる様々な問題を取り上げ、「危機的な子どもをめぐる環境にどう対処すべきか」とし、各方面の専門家から問題点の指摘と将来に向けての展望についてご意見を伺うことにしました。

環境福祉学の新たな展開を目指して、次の世代のために何をすべきか、またどんな夢を託すか、を大いに考え、語る大会にしたいと思います。多数の方々のご参加をお待ち申し上げます。

大会実行委員長 鴨下 重彦

「私の描く、日本の環境福祉！」
～ビジネスモデルと環境福祉の融合～

株式会社 コスト削減総合研究所
広報プロデューサー 島崎 夕樹氏

コスト削減総合研究所で行っているメインのビジネスは、電力の「見える化」、こちらを計測するモニター画面を、コンサルをしながら販売しています。

会社のビジョンとして、障害者の方へのアウトソーシングを常々考えていたのですが、お願いできる項目がすぐには見つかりませんでした。どの部分が、障害者の方の団体にアウトソーシングできるということを目的に、ビジネスモデルの中から問題を抽出して、出てきたのが、お客様の電力の使用量を計測すること、計量日に合わせてデータを収集して検証する検証作業というものが、基本的なPC操作ができればお願いできるのではないかとということが見えてきました。検証業務をするにも、きめ細やかな、計量日に合わせた正確な検針作業が必要です。社内では兼業で行っている者よりも、それを専業でアウトソーシングしたほうが、より質のいいお仕事ができるという付加価値も見えてきました。

社内の関連部と十分に討議を行い、炭谷先生に障害者団体の担当者を紹介していただき、業務委託先として、新潟県在住のHさんと、社団法人ワークショップかたつむり会という、杉並にある障害者の作業所が決まりました。

新潟のHさんは重度の脳性まひのある43歳の男性で、職業訓練校などで高度なPCスキルを身につけており、柏崎の原発で設備関係のお仕事をPCでしていましたが、地震でお仕事をなくされて、求職中ということでした。

実際の業務ですが、パソコンでの細かい入力作業がなかなか難しいということもあって、お客様から過去データ、電力使用量をちょうだいして、電力実績一覧で最大のデマンド値、電気の使用量を計測させていただきます。私どもでフォーマットを作り、実際に検証作業を行っていただく方が数字だけを入力できるようなかたちに整備しました。パソコンの用語でドラッグすることや表を作ったりといったことは、手が不自由ということであまり行かないようでしたので、できるだけ作業の軽減ができるように、数字だけの入力ができるようなかたちでフォームを作りました。

納品・効果・検証入力フォームですが、私どもで



島崎 夕樹 氏

出来ることはお手伝いするというので、数字を入れるだけにしたものに数字を入力して、納品をいただいております。

次に、実際に業務を行うまでのポイントです。障害者の方だからといって過分に保護を行うのではなく、パートナーとしてお互い尊重し合いながら、業務内容や賃金体制を明確にして進行しました。ここでは実際にコーディネーターの方に携わっていただいて、中立的な立場で諸条件を決めていきました。通常よりも作業時間がかかるので、発注を小ロットにして、実際の業務を行っていますが、入力のミスは3/500という程度で、社内で行っていたものと変わらないクオリティです。

また、お客様へのご案内状等のDMなどについて、ラベル貼りとラベルの印刷、発送作業といったあたりをワークショップかたつむり会にお願いしています。

また、ハローワークを通じてのシニア採用等も行っています。これはお客様のもとに足を運んで、実際に検針作業をしていただくという、比較的キャリアのある方が行かれたほうがより効果が出やすいという仕事の項目がありましたので、セカンドキャリアのご提案ということで、ハローワークを通じてシニアの方を8名採用しています。

最後になりますが企業と従業員、そして対象者、障害のある方や社会的に弱者と言われている方たちが、それぞれインタラクティブな相乗効果で事業を行っていったらと考えています。企業なら理念、理想などがあり、そこから必要なものと得られるもの、それぞれ与える側と与えられる側という感覚で、すべてのものが相乗的に社会的な意識が上がってくれば、それが一番のビジネスモデルと環境福祉の融合ではないかと考えています。

「自発光（蓄光）塗料による安心・安全・省エネの街・施設作りと災害時の暗闇での緊急避難誘導システムの確立」

エム・アイ・エイ企画株式会社
代表取締役 水上 徹氏

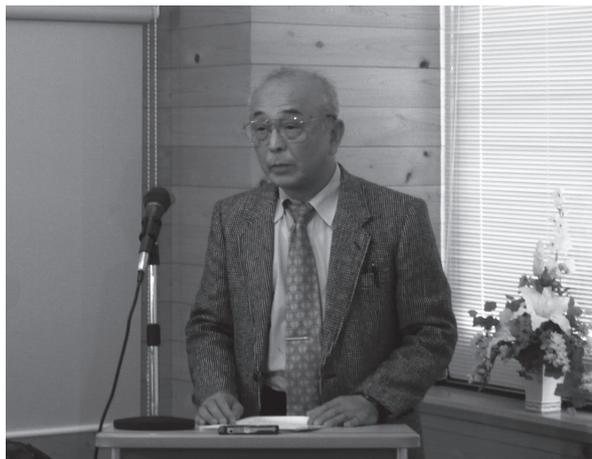
最初に、蓄光とは何かというと、紫外線領域、あるいは若干紫の領域に入った光エネルギーを吸収して、電気がなくなったとき、暗闇になったときに光を発するものを蓄光と称しています。ただし、蓄光という言葉については、JISのうえでは色座標、x y zの座標でグリーンだけを指定しており、ブルー、あるいは赤、黄色は、実際にはJISのうえでは蓄光と言ってはいけないことになっています。ですから、あえて手前どもは「自発光」という言葉を使わせていただいて、「（蓄光）塗料」と呼ばせていただいています。

一方、蛍光というのは、紫外線領域、それと紫の領域のエネルギーを受けて、即その場で発光します。蓄光は、その中にエネルギーを貯め込んで、暗闇になったときに発光します。この違いがあります。

次に、法律関係、あるいは世界の状況ですが、一番進んでいるのはアメリカのニューヨーク州で、9・11テロの半年後にニューヨーク州はビル建築基準を作り、規制化、規格化して随時やっています。それと同じところに、ISOのほうでもこれをやっています。ISOは、立体的にあらゆる場所から避難の最終場所まで視覚的かつ連続的、途切れることのない誘導をしなさいと規定しています。

一方、日本では地下鉄、メトロでは、300ミリ×130ミリのピクトサイン、明示物を10メートル間隔で、東京消防庁が規格化してやりなさいということをやっています。こういうことをやることによって、安心・安全・省エネの街・施設作りといったものが可能になってくると思います。特に階段や手すりといったところは、意外と手暗がりになります。あるいは表だと、駐車場の車止めが車の陰で足元が暗くなって、後部座席のドアを開けるとつまずいてしまう。そのような事故もままあります。

また、施設関係においては、ISOとニューヨークのビル建築基準に基づいて、特別養護老人ホームの室内塗装や、病院で緊急避難時に非常口の出口に誘導してあげられるように明示したり、階段につまづかないように逃げてくださいという表示をするように提案できると思います。



水上 徹氏

そして、最後は、身障者雇用促進事業への提案になりますが、印刷は受注産業なので、事業として安定しない部分が多く、意外と手作業が多くあります。例えば、お配りしたサンプルの表紙に、袋にスクリーン印刷で印刷した1編が付けてありますが、袋入れして何かに縫い込むといった作業が意外と多くあります。それと塗料ともう一つ、スクリーン印刷をできるように設計してあります。スクリーン印刷というのは非常に小資本で、手先の仕事、芸術的な仕事になりますので、いろいろなレベルに応じた事業展開ができます。

一番ポイントとなるのは、特別な国家資格はいらないし、いま進めているUV効果タイプだと、有機溶剤を使えない。有機溶剤障害がないので、非常によろしいかと思います。

30年ほど前に中野区の江原にコロニー学園という身障者だけの印刷関連の作業所がありました。ここでは私が提案させていただいた、展示の印刷物をスクリーン印刷で作る、そこ発で各学校に配った事例もあります。

最後に、ISOとニューヨークのビル建築基準を念頭に入れて、今度、北海道洞爺湖サミット記念環境総合展に出展を予定しており、ISO、ニューヨークの建築基準に基づいた避難誘導のモデルのブースを作る計画をしています。

概要

環境福祉学会第4回年次大会

日時：平成20年11月9日（日） 10：00～17：00

場所：東京大学医学部鉄門記念講堂

特別講演：小池百合子（元環境大臣）

基調講演：炭谷 茂（前環境事務次官、休暇村協会理事長）

パネルディスカッション

「危機的な子どもをめぐる環境にいかに対処すべきか」

コーディネーター：鴨下 重彦、寺田 清美

演題（仮題）・パネリスト（予定）

「超高層住宅における育児」

織田 正昭（東大医学部母子保健学講師）

「山間過疎地での子どものための街づくり」

山崎 洋（三笑楽酒造社長）

「食育からみる子どもの諸問題」

寺田 清美（東京成徳短期大学教授）

「シュタイナーの教育に学ぶ」

子安美知子（早稲田大学教授）

「幼児期の体験学習の重要性」

永井 伸一（独協医大名誉教授、独協中学・高校長）

コメンテーター：炭谷 茂

大会参加費：5,000円、懇親会費：4,000円

一般演題申し込み
2008年8月30日締切り

環境福祉学会 事務局

〒106-0047 東京都港区南麻布5-16-6コウセイ広尾3F <http://www.kankyofukushi.jp>

TEL.03-3447-3321 FAX.03-3447-3681

E-mail : info@kankyofukushi.jp

■ 環境福祉学会組織及び役員一覧

会 長	江草 安彦	社会福祉法人旭川荘名誉理事長／川崎医療福祉大学名誉学長
副 会 長	鴨下 重彦	(財)小児医学研究振興財団理事長／東京大学名誉教授
	炭谷 茂	前環境事務次官／(財)休暇村協会理事長
	堀越 哲二	堀越学園理事長／創造学園大学学長
	伊藤 達雄	社団法人環境創造研究センター理事長／名古屋産業大学名誉学長
理 事	松寿 庶	社会福祉法人全国社会福祉協議会常務理事
	波田 幸夫	環境新聞社会長
	長田 逸平	社団法人日本経済団体連合会事務総長付
	藤田 八暉	久留米大学教授
	土井 康晴	社団法人生活福祉研究機構専務理事
	泉谷 直木	アサヒビール株式会社常務取締役
	安川 緑	金沢大学医薬保険研究域保険学系准教授
	児玉 剛則	社団法人環境創造研究センター専務理事
	寺田 清美	東京成徳短期大学教授
監 事	永井 伸一	獨協中学・高等学校校長／獨協医科大学名誉教授
	平野 寛	杏林大学名誉教授
事 務 局 長	小峰 且也	環境新聞社取締役
事 務 局	酒井 剛	環境新聞社広告・事業担当次長
	王 豊	創造学園大学東京本部所長

事務局 だより

環境福祉学会のテーマは環境と福祉の融合。「もったいない」が環境の心なら、環境福祉の心は、なんと一言で表現すればよいのだろう。

「人と環境にやさしい心」「思いやり」などが思いつくが、いまひとつ納得するものが出てこない。

環境が足しか見えない大地に聳え立つ巨人なら、福祉は揺りかごで笑う赤ちゃん、とでも言えようか。

「赤ちゃん、巨人さん、ほろ満開よサクラソウ」こんな呼びかけの中に、環境福祉の心はあるのかもしれない。